

## インドネシア語の情報構造と名詞述語文

降幡 正志

## 1. はじめに

インドネシア語の情報構造について, Halim(1974) はイントネーションの担う役割に関して興味深い分析を行なっている<sup>1</sup>. 同論の中で, Halim は文を構成する「ポーズグループ」(pause group) につき, 文法カテゴリーに関わる基底的なピッチパターンの抽象的なモデルとして以下の4つを挙げている (Halim 1974:158)<sup>2</sup>.

- 2-31f 無標の題述 (unmarked comment)
- 2-32f 有標の題述 (marked comment)
- 2-33r 焦点化された主題 (focalized topic)
- 2-11f 焦点化されていない主題 (unfocalized topic)

主題 (topic) と題述 (comment) が1文中で1対1の対応をする場合, その語順によって以下の2つのパターンとなる<sup>3</sup>.

(00a)	2-33r 焦点化された主題	//	2-31f 無標の題述	#
(00b)	2-32f 有標の題述	//	2-11f 焦点化されていない主題	#

以下に, アンケートの項目にしたがって対応するインドネシア語の表現を示して説明を加えていくが, 必要に応じて上述の Halim の説にも言及する<sup>4</sup>.

<sup>1</sup> Halim(1981) は Halim(1974) と同内容であり, Halim(1984) はそのインドネシア語訳である. また, Halim のイントネーション論を基にした論考として, 崎山(1990), 降幡(2005, 2014), Furihata(2006) などがある.

<sup>2</sup> 同モデルにおいて, ピッチの高さを3段階が分けられ, 3が最も高く, 1が最も低い. また r は上昇 (rising) を, f は下降 (falling) を意味している.

<sup>3</sup> 同モデル内の // はポーズグループの境界を, # は文末であることを示す.

<sup>4</sup> 本稿におけるインドネシア語データのチェックについては, Thathit Puspaning Gegana 氏 (東京外国語大学研究生) に協力を依頼した. 同氏に感謝の意を表する次第である.

## 2. インドネシア語データ<sup>5</sup>

[1] 「えっ、一郎が来たの?」「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」【対比焦点(主語)】

(01a) Eh, Ichiro datang?

INTJ Ichiro come 「えっ、一郎が来たの?」

(01b) Bukan. Bukan Ichiro, tapi Jiro yang datang.

NEG NEG Ichiro but Jiro REL come

「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」

(01b') Bukan. Bukan Ichiro, tapi Jiro lah yang datang.

NEG NEG Ichiro but Jiro-LAH REL come

「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」

(01b'') Yang datang (itu) Jiro, bukan Ichiro.

REL come that Jiro NEG Ichiro 「来たのは次郎で、一郎じゃない。」

(01a) に対する応答として挙げた3例のうち、(01b)と(01b')は述語 *Jiro* 「次郎(だ)」が主語 *yang datang* 「来たの/来た人」に先行する語順である。Halim のモデルに基づくと、述語が「有標の題述」、主語が「焦点化されない主題」となり、(00b)のようにそれぞれ 2-32f, 2-11f のイントネーション型をとる。会話では、このようなイントネーション型を伴うことにより (01b) がごく自然な文として用いられる。一方、(01b')に見られる *-lah* は、述語(より正確には題述)であることを明示する接尾辞で、その使用は随意的であるが、このような文ではより書き言葉的であると感ぜられる<sup>6</sup>。

(01b'') は主語 *yang datang (itu)* - 述語 *Ichiro*, あるいは Halim にしたがえば「焦点化された主題-無標の題述」の語順であり、(00a) のイントネーション型をとるといえる。

<sup>5</sup> 本稿における文例は正書法に基づいて表記する。なお、文例中の斜線 (/) はその前後の語が入れ替え可能であることを、また括弧内の語は省略可能であることを示す。

<sup>6</sup> Sneddon, et al.(2010) は、*-lah* について「従来“述語マーカ―”(predicative marker) および“前景化マーカ―”(foreground marker) と呼ばれてきた」と紹介し、その用法につき解説を行なっている。Cole, et al.(2005) は *-lah* を「焦点マーカ―」(focus marker) と見なしている。なお本稿では、*-lah* に対するグロスを斜字体を用いて *-LAH* としておく。

[2] 「誰が来た (の) ?」「一郎が来たよ。」【WH 焦点 (主語)・WH 応答焦点 (主語)】

(02a) Siapa yang datang?  
 who REL come 「誰が来たの?」

(02a') Yang datang siapa?  
 REL come who 「来たのは誰?」

(02a'') Siapa saja yang datang?  
 who just REL come 「誰が来たの?」

(02a) では「来たの/来た人」が主語、疑問詞「誰」が述語となるため、主語に対して関係詞 *yang* を用いることが必須となる。なお、(02a') は (02a) と同じ意味であるが「主語－述語」の語順となっている。

(02a'') のように疑問詞が *saja* を伴うと、「該当する答えを列挙してほしい」といったニュアンスを表す。

(02b) Ichiro yang datang.  
 Ichiro REL come 「一郎が来たよ。」

(02b) は「一郎だ、来たのは」つまり「述語－主語」の語順であり、ここでも関係詞 *yang* は必須となる。

[3] 「一郎の方が大きいんじゃないの?」「いや、一郎じゃなくて、次郎の方が大きいんだよ。」【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】

(03a) Ichiro lebih tinggi, kan?  
 Ichiro more tall PTCL 「一郎 (の方) が背が高いんじゃない?」

(03b) Tidak. Jiro lebih tinggi Daripada Ichiro.  
 NEG Jiro more tall Than Ichiro  
 「いや、次郎 (の方) が一郎より背が高いよ。」

(03b') ? Jiro yang lebih tinggi. Bukan Ichiro.  
 Jiro REL more tall NEG Ichiro

(03a) に対する応答として、協力者によると (03b) が自然であるとのことであった。協力者の発音を観察すると、主語の *Jiro* が「有標の題述」、述語の *lebih tinggi* が「焦点化されない題述」のようなイントネーション、すなわち (00b) のように聞こえた。

「より背が高いのは次郎だ」すなわち (03b') のような文は可能かどうか尋ねたところ、このケースでは (03b) に比べて自然さに欠けるとの回答を得た。

[4] 【電話で】「どうした (の) ?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

【文焦点 (自動詞文)】

(04a) Ada apa?

exist what 「何があったの？」

(04a') Kenapa?

do.what 「どうしたの？」

(04b) Eh, ada tamu nih. 「あつ、客がいるんだ。」

INTJ exist guest PTCL

(04b') Eh, itu, ada tamu. 「あつ、その、客がいるんだ。」

INTJ that exist guest

(04b'') Oh, barusan ada tamu. 「あつ、たった今客が来たんだ。」

INTJ just.now exist guest

(04a) や (04a') に対する応答として、(04b) ~ (04b'') が例として得られた。単に「客がいる／客が来た」というよりも、(04b) のように近場を指す文末詞 *nih* などを用いたり、(04b') のように「ほら、その」といったニュアンスで指示詞 *itu* を用いたりするほうが会話では自然である。(04b'') は *barusan* を用いてより説明的になっていると考えられる。

[5] 「あの子供が一郎を叩いたんだって!?!」「いや、一郎じゃなくて、次郎を叩いたんだよ。」  
【対比焦点（目的語）】

(05a) Katanya, anak itu memukul Ichiro, ya.<sup>7</sup>  
it.is.said child that *MEN*-hit Ichiro PTCL

「あの子供が一郎を叩いたんだってね。」

(05a') Saya dengar anak itu memukul Ichiro, ya.  
1SG hear child that *MEN*-hit Ichiro PTCL

「あの子供が一郎を叩いたって聞いたよ。」

(05b) Tidak. Dia memukul Jiro, bukan Ichiro.  
NEG 3SG *MEN*-hit Jiro NEG Ichiro

「いや、彼（女）は次郎を叩いたんだ、一郎じゃなくて」

(05b') Tidak. Yang dipukul anak itu Jiro, bukan Ichiro.  
NEG REL *DI*-hit child that Jiro NEG Ichiro

「いや、その子供が叩いたのは次郎で、一郎じゃないよ」

(05b'') Yang dia pukul (itu) Jiro, Bukan Ichiro.  
REL 3SG hit that Jiro NEG Ichiro

「彼（女）の叩いたのは次郎だよ、一郎じゃなくて」

(05b''') Yang dipukul (itu) Jiro, bukan Ichiro.  
REL *DI*-hit that Jiro NEG Ichiro

「叩かれたのは次郎で、一郎じゃないよ」

(05a) や (05a') に対する応答として2通りの方法がある。まず1つは (05b) のように前に述べられた文と同じ語順をとるものである。ただし、「主語－述語」の構造と「主題－題述」の構造にずれが生じる。この場合、*Dia memukul // Jiro #* のようなイントネーション型、

<sup>7</sup> *memukul* 「叩く」は接頭辞 *meN-* プラス他動詞語幹 *pukul* の語構成となっている。接頭辞 *meN-* は対応する主語が動作主であるという文法関係を表す。また、以後に現れる *dipukul* は対応する主語が被動作主であるという文法関係を示す接頭辞 *di-* を伴っている。本稿では、*meN-* と *di-* に対するグロスとして、斜字体を用いて *MEN-* および *DI-* としておく。

すなわち主題が *Dia memukul* 「彼が叩いた (のは)」, それに対する題述が *Jiro* 「次郎 (だ)」となる。

もう1つは, (05b') ~ (05b'') のように *yang* を用いて「その子供/彼 (女) が叩いたのは」あるいは「叩かれたのは」と関係節化した部分を主語とし, それに対し述語として「次郎だ」と述べる方法である。

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど, どっちを買う (の) ?」「(私は) 青い袋を買うよ。」  
【対比焦点 (目的語, 特に「どっち」という対比的な疑問語の場合)】

(06a) Ada kantong merah dan kantong biru, nih. Kamu mau beli yang mana?  
exist bag red and bag blue PTCL 2SG will buy REL which  
「赤い袋と青い袋があるよ. 君はどっちを買う?」

(06b) Aku beli kantong yang biru.  
1SG buy bag REL blue 「僕は青い (方の) 袋を買うよ。」

(06b') Aku beli yang biru.  
1SG buy REL blue 「僕は青い方を買うよ。」

(06b'') Yang biru saja.  
REL blue just 「青い方にしておくよ。」

(06a) に対する応答として, (06b) では「青い袋」と述べる際に *yang* を用いる. これは, *yang* に他者との対比における選択的な用法があるため, *kantong yang biru* は「袋で, 青い (方の) もの」といった句となっている.

文脈上明らかであれば, 特に会話では *yang* 関係節の先行詞を述べないことが多い. (06b') では「袋」のことを述べていることは明白で, 単に *yang biru* 「青い (方の) もの」と言うだけで十分である.

また会話では, (06b'') のように *saja* を伴うこともよくあり, ここでは「~にしておくよ」といったニュアンスを表す.

[7] 「一郎はどうした?」「一郎は朝からどっかへでかけたよ。」【述語焦点】

(07a) Ichiro ke mana?  
Ichiro to where 「一郎はどこへ行った?」

(07a') Ichiro di mana?

Ichiro at where 「一郎はどこにいる？」

(07b) Dia / Ichiro sudah pergi sejak pagi.

3SG Ichiro PERF go since morning

「彼／一郎は朝からもう出掛けているよ。」

(07b') Sudah pergi pagi-pagi tadi.

PERF go early.this.morning 「今朝早くからもう出掛けているよ。」

日本語では姿の見えない一郎について「どうした？」と尋ねられるが、インドネシア語ではむしろ「どこに行った？」(07a)あるいは「どこにいる？」(07a')のように所在を尋ねる方が自然である。

そのような質問により話題が「一郎」であることは明白であり、会話では(07b')のように発話に主語のないこともよくある。

[8] 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

【WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)】

(08a) Anak itu memukul siapa?

child that MEN-hit who 「あの子供は誰を叩いたの?」

(08b) Anak itu memukul adiknya sendiri.

child that MEN-hit younger.sibling-3SG Self

「あの子は自分の弟／妹を叩いたんだ。」

(08b') Dia memukul adiknya sendiri.

3SG MEN-hit younger.sibling-3SG self

「彼 (女) は自分の弟／妹を叩いたんだ。」

(08b'') Memukul adiknya sendiri.

MEN-hit younger.sibling-3SG self

「自分の弟／妹を叩いたんだ。」

インドネシア語は、主語の場合を除いて疑問詞は基本的に当該の位置に用いる。(08a)では、他動詞 *memukul* の目的語の位置にそのまま疑問詞 *siapa* 「誰」が現れている。それに対する応答も、(08b) ~ (08b'') の *adiknya sendiri* 「彼 (女) 自身の弟／妹」のように基本

的に同じ位置に現れる。なお、(08b'') は (07b') と同様に、話題（主題）が「その子供」であることが明白なため、会話として主語のない発話となっている。

[9] [電話で]「どうした(の)?」「うん、一郎が(自分の)弟を叩いたんだ。」  
【文焦点(他動詞文)】

(09a) Eh, kenapa?  
INTJ do.what 「おや、どうしたの?」

(09a') Ada apa?  
exist what 「何があったの?」

(09b) Itu..., Ichiro memukul adiknya.  
that Ichiro MEN-hit younger.sibling-3SG  
「それがね、一郎が弟/妹を叩いたんだ。」

(09a) や (09a') に対して、文のみで応答するよりも、(09b) の *itu* のように何らかの要素でまず言い始める方が会話として自然である。

[10] 「あのケーキ、どうした?」「ああ、(あれは)一郎が食べちゃったよ。」  
【目的語主題化、主題(目的語)の継続性 いわゆる **pro-drop** 言語の可能性】

(10a) Kuenya kenapa?  
cake-DET do.what 「(例の)ケーキはどうした?」

(10b) Ah, kuenya dimakan (oleh) Ichiro.  
INTJ cake-DET DI-eat by Ichiro 「あ、ケーキは一郎が食べたよ。」

(10b') Ah, dimakan (sama) Ichiro.  
INTJ DI-eat by Ichiro 「あ、一郎が食べたよ。」

(10a) に対する応答として、(10b) では主語 *kuenya* をそのまま述べている。フォーマルな文体では主語と述語を揃えることが要求される。なお、*oleh* は接頭辞 *di-* を伴う(すなわち対応する主語が被動作主である)他動詞において動作主を導く前置詞だが、*oleh* を用いずに動作主を直接続けることもできる。



(07b') や (08b'') のところでも述べたが、会話では文脈上明らかな場合に主語を述べないことがよくある。(10b') もその例である。なお会話では、*oleh* の代わりに前置詞として *sama* がよく用いられる。

[11] 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。」【分裂文】

(11) Yang saya beli di toko kemarin Adalah Buku ini.  
REL 1SG buy at store yesterday COP Book this  
「私が昨日お店で買ったのはこの本だ。」

(11') Yang saya beli di toko kemarin (itu) Buku ini.  
REL 1SG buy at store yesterday That Book this  
「私が昨日お店で買ったのはこの本だ。」

(11'') Buku ini yang saya beli di toko kemarin.  
book this REL 1SG buy at store yesterday  
「この本だ、私が昨日お店で買ったのは。」

(11''') Buku inilah yang saya beli di Toko kemarin.  
book this-LAH REL 1SG buy at Store yesterday  
「この本だ、私が昨日お店で買ったのは。」

*yang* に導かれる関係節は先行詞を伴わずに用いることが可能である。(11) は、コンピュータを用いているが、これはフォーマルな文体と捉えられる。会話では (11') のようにコンピュータを用いないこともよくあるが、「焦点化された主題—無標の題述」というイントネーション型によって区別が可能である。あるいは、指示代名詞 *itu* を用いることにより、その部分が句の境界となることがわかる<sup>8</sup>。

(11'') および (11''') は述語が主語に先行する語順となっており、「有標の題述—焦点化されていない主題」のイントネーション型となる。特に (11''') は、(01b') と同様に接尾辞 *-lah* を伴っている。

<sup>8</sup> 指示代名詞 *ini* 「これ」、*itu* 「それ／あれ」は句内で最も後ろに現れるという統語上の制約があるため、用いられた場合にはそこが句の境界となる。

[12] 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

【指定文：主題（名詞述語文の主語）の継続性】

(12) Orang itu seorang guru. Sudah tiga tahun mengajar di sekolah ini.  
person that one teacher PERF three year *meN-teach* at school this  
「あの人は先生だ。この学校でもう3年教えている。」

(12') Orang itu adalah seorang guru. Dia sudah tiga tahun mengajar  
person that COP one teacher 3SG PERF three year *meN-teach*  
di sekolah ini.  
at school this 「あの人は先生だ。彼（女）はこの学校でもう3年教えている。」

会話あるいは特定の文体では、複数の文にわたって話題（主題）が継続することがありうる。(12) は *orang itu* 「あの人」が後続する文で省略されても主題として継続していることがわかる。なお、フォーマルな文体では、(12') のように *Copula adalah* を用いたり、主題が継続している場合でも主語を述べることが要求される。

[13] 「彼のお父さんは、あの人だ。」【倒置指定文】

(13) Ayahnya (adalah) pria/orang yang itu.  
father-3SG COP man/person REL that  
「彼（女）のお父さんは、あの男性／人だ。」

(13') Ayahnya (adalah) yang itu.  
father-3SG COP REL that 「彼（女）のお父さんは、あの人だ。」

(06b), (06b') でも述べたが、関係詞 *yang* は選択的用法をあわせ持つ。(13), (13') では、複数いる人物との対比の中でどの人物かを選択するため、(*pria/orang*) *yang itu* のように *yang* を用いることになる。

[14] 「あの人が彼のお父さんだ。」【指定文】

(14) Orang/Pria itulah ayahnya.  
person/man that-LAH father-3SG 「あの人が彼（女）のお父さんだ。」

(14') Orang / Pria itu, ayahnya.

person / man that father-3SG 「あの人が彼（女）のお父さんだ。」

「あの人が彼のお父さんだ」といった表現は、インドネシア語では「あの人だ、彼のお父さんは」すなわち「述語－主語」の語順の文が対応することになる。(14), (14')はいずれも (00b) すなわち「有標の題述－焦点化されていない主題」のイントネーションを伴ってこのような意味を伝えることになる。

[15] 「あさってってというのはね、あしたの次の日のことだよ。」【定義文】

(15) Lusa itu Adalah hari sesudah besok.

day.after.tomorrow that COP day after Tomorrow

「明後日（というの）は、明日の次の日だ。」

指示代名詞 *itu* は「それ（その）、あれ（あの）」のように前出の事物を指し示すだけでなく、「～というものは」すなわち定義する際の対象を表す用法もあり、(15) のような文では *itu* が必要となる。

[16] 「私はコーヒーだ。」【ウナギ文】

(16) Saya, kopi.

1SG coffee 「私はコーヒーだ。」

(16') Kalau saya, kopi.

if 1SG coffee 「私はコーヒーだ。」

いわゆる「ウナギ文」は、インドネシア語ではよく用いられる。(16) のような文では、(00a) すなわち「焦点化された主題－無標の題述」のイントネーションを伴う。

また、条件を表す接続詞 *kalau* 「もし、～ならば」は、会話においてその導く節がしばしば主題 (topic) であることを示す。(16') の *kalau saya* は「私は、私について言えば」といった表現である。

[17] 「コーヒーは私だ。」【逆行ウナギ文】

(17) Saya.

1SG 「私だ。」

(17') Kopi, saya.

coffee 1SG 「コーヒーは、私だ。」

「コーヒーは誰ですか?」といった問に対して「私である」ことを伝える場合、最も自然なのは (17) である。

「コーヒーは私だ」という日本語の表現に対応して、(17') も可能である。ただし、これまで述べてきた Halim によるイントネーション型の 2 つのモデル、すなわち (00a) や (00b) とは異なるようで、協力者の発話を観察したところでは、kopi の部分が「焦点化された主題」(2-33r), saya が「焦点化されていない主題」(2-11f) のように聞こえた。このようなパターンに関する分析は、今後さらなる検討が必要である。

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

(18) Buku yang baru dan tebal itu mahal.

book REL new and thick that expensive 「その新しくて厚い本は高価だ。」

「新しい」と「厚い」のように複数の修飾語が並列的に 1 つの名詞を修飾する場合、(18) のように関係詞 yang を用いて述べなければならない。なお、主語「その新しくて厚い本（は）」の句末の itu は指示詞であると同時に、(11') で述べたように句の境界となることを示す。

[19] 「あっ、砂糖が無くなっているよ！」【意外性 (mirativity)】

(19) Ah, gulanya (sudah) habis!

INTJ sugar-DET PERF all.gone 「あっ、砂糖が無くなっている！」

(19') Ah, habis gulanya!

INTJ all.gone sugar-DET 「あっ、砂糖が無くなっている！」

(19”) Ah, gulanya habis, nih / lho.

INTJ sugar-DET all.gone PTCL 「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

(19) と (19”) は主語と述語の語順が入れ替わっているが、いずれにしても主語の *gula* 「砂糖」が本来あるべきと想定されるため、文脈指示を表す *-nya* が必要となる。他人に「砂糖が無くなっている」ことを伝達する際には、(19”) のように *nih* や *lho* などの文末詞を伴う。

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！田中君だったな。」  
【思い出し】

(20) Nanti siang saya harus ketemu seseorang, tapi siapa ya...?

later daytime 1SG must meet someone but who PTCL

O ya! Si Tanaka.

INTJ yes TTL Tanaka

「今日の昼に誰かに会わなければならないが、誰だろうか…？あ、そうだ！田中君だ。」

「田中君だったな」の部分は、(20) のように単に “Si Tanaka.” 「田中君 (だ)」と述べることができる。あるいは、“Ketemu (si) Tanaka.” 「田中君と会う (んだ)」と言うこともある。

### 略語

1SG	1st person singular	NEG	negative
2SG	2nd person singular	PERF	perfective
3SG	3rd person singular	PTCL	particle
COP	copula	REL	relative
DET	determiner	TTL	title
INTJ	interjection		

## 参考文献

- Cole, Peter, Gabriella Hermon and Yassir Nasanius Tjung. 2005. "How Irregular is WH in Situ in Indonesian?" *Studies in Language*, 29:3. pp.553-581.
- 降幡正志. 2005. 「インドネシア語 ada 存在文のイントネーションに関する一考察」, 『東京外大東南アジア学』第 10 巻. 東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究室. pp.32-51.
- FURIHATA, Masashi. 2006. "An Acoustic Study on Intonation of Nominal Sentences in Indonesian", in Kawaguchi, Y., Ivan Fonagy and Tsunekazu Moriguchi (eds.), *Prosody and Syntax -- Cross-linguistic Perspectives -- (Usage-Based Linguistic Informatics 3)*. Amsterdam: John Benjamins. pp.303-325.
- 降幡正志. 2014. 「インドネシア語名詞文の超分節特性に関する考察」, 『東京外大東南アジア学』第 19 巻. 東京外国語大学外国語学部東南アジア課程研究室. pp.86-101.
- 崎山理. 1990. 「日本語とインドネシア語のアクセントとイントネーション」, 杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育』第 3 巻: 日本語の音声・音韻 (下). 明治書院.
- Sneddon, J. N., et al. 2010. *Indonesian: A Comprehensive Grammar*. 2nd edition. London: Routledge.
- Halim, Amran. 1974. *Intonation in Relation to Syntax in Bahasa Indonesia*. Jakarta: Djambatan.
- , 1981. *Intonation in Relation to Syntax in Indonesian*. Canberra: Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, The Australian National University. Pasific Linguistics D 36. Materials in Languages of Indonesia 5.
- , 1984. *Intonasi dalam Hubungannya dengan Sintaksis Bahasa Indonesia*. Translated by Tony S. Rachmadie from Halim(1974). Jakarta: Djambatan.